

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 25 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25350024

研究課題名(和文) 伝統的な祭司空間にみる地域の自然生態的インフラの継承システムに関する研究

研究課題名(英文) A Study on management system of natural ecological infrastructure in traditional place for ritual in the region

研究代表者

上南木 昭春 (KAMIHOGI, AKIHARU)

大阪府立大学・生命環境科学研究科・教授

研究者番号：70152858

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：モイドン調査では、農地整備等の影響により、約50年間でモイドンが消失・縮小・移動し、祭りや掃除等の地域住民の係わりも減少していること、モイドンに関わる行事、管理は簡素化し、門単位での管理が困難になってきていることが明らかとなった。モイドン、カミヤマ、ウタキなどの伝統的な地域資源はいずれも、地域の自然生態インフラとして機能していることを確認したが、市街化の進行やライフスタイルの変化などにより、伝統的な地域資源とそれに関わる祭りなどの継承が困難になっており、地域の拠り所となる祭祀空間のマネジメントあり方を探る重要性が再認識された。

研究成果の概要(英文)：The results show that Moidon tends to disappear, reduce or be moved in recent 50 years for some kind of development such as agricultural field improvement and the relation to local residents such as the festival and cleaning tends to decrease. Annual events and management of Moidon has been simplified, and it becomes difficult to manage Moidon by Kado-unit. It is suggested that the traditional place for ritual such as Moidon, Kamiyama, and Utaki has a function as natural ecological infrastructure in the region, but management of them has been difficult with urban spread and changes in lifestyles. It is necessary to regenerate them as the standpoint of the community.

研究分野：地域生態学、ランドスケープ科学

キーワード：祭祀空間 民間信仰 自然生態的インフラ 生態系サービス 緑地マネジメント

## 1. 研究開始当初の背景

近年の緑地保全では、現状凍結的な保全が制度的には可能であるが、従来享受されてきた多面的生態系サービスの改善までには至っていない状況にある。一方、九州南部から沖縄地域で継承されてきた民間信仰である「モイドン」「ノロ」「オン」などの祭祀空間を含む緑地は、集落の生活基盤を形成する場として機能し、様々な生態系サービスも享受し続けられていると類推される。さらに、東日本大震災においては、過去の記憶が継承されずに被災を受けた集落も多く、長い時間スケールの中で、地域の自然生態的なインフラを継承する仕組みが必要と考えられる。このような背景を踏まえ、本研究では、集落に見られる伝統的な祭祀空間に着目し、精神文化的側面を加味した自然生態的インフラの継承システムを明らかにすることを目的として研究を進めた。

## 2. 研究の目的

(1) 鹿児島県のモイドンの研究目的： モイドン(森殿)とは、薩摩・大隅半島にしばしばみられる古い民間信仰の聖地、あるいはその聖地で祀られる神のことを指し、この地方で門(かど)と呼ばれる藩政以来の農民の同族集落によって祀られている。森といっても大きなものではなく、時には一本の大木や一叢の藪だけのこともある。モイドンに関する既往研究としては、昭和30~40年頃にかけて実施された民俗学者の小野重朗氏らによる民俗学的な研究にとどまっており、それ以降の存続状況は不明である。しかし、モイドンは古くから祀られ、集落の核となる存在であることから、地域の緑地計画の中で扱うべき重要な緑と考えられる。そこで本研究では、緑地計画学的な視点によるモイドンの存在意義や今後の保全・管理方策を検討するため、モイドンの主要な分布地である錦江町周辺を対象に、モイドンの立地や存続状況を明らかにすることを目的とした。

(2) 奄美大島のノロ祭祀空間の研究目的： 奄美大島には、中世に首里王府より任命された女性祭

司であるノロによって各地域の祭祀が営まれる「ノロ制度」が存在し、近世に薩摩化が進められた時勢においても粛々と継承されてきた。しかしながら、近代以降、部落であるシマの人口減少や就業形態、集落構造の変化の影響を受け、祭祀の中心となるノロの不在が各シマで見られるようになり、昭和40年代には最後のノロの逝去をもって奄美大島のノロ制度は消失した。このノロ祭祀には、シマの信仰対象である聖地としての「カミヤマ」、シマの中心にある広場である「ミヤージュ」、カミヤマに来临した神が山からシマに下る際に通る道である「カミミチ」という祭祀空間が存在し、これらが核となってシマを構成してきた。さらに、祭場となる「アシャゲ」や「トネヤ」という装置が付帯し、ここを祀り、管理するノロおよび神役によって祭祀はもちろん、シマ自体が構成・継承されてきた。上述の通り、ノロが不在となって久しいが、これらの祭祀空間や装置が残されたシマはいくつかみられ、現状においても奄美の伝統的な集落形態を垣間見ることができる。そこで本研究では、伝統文化の残るまちづくりにおけるハード整備への一助とすべく、奄美大島のノロ祭祀空間の継承状況と都市構造の変容との関係性を明らかにすることを目的とした。

(3) 八重山地域のオン(御嶽)の研究目的： 八重山地域では、島内の集落の起源と密接に関係しながら森や泉などの自然神を祀るオン(御嶽、ウガンとも)が数多く残存している。既往知見より、これらのオンには、祟りや禁忌が存在するなど独特の集落規範において今日まで継承されてきたものと考えられることから、オンの自然生態的なインフラや、その継承システムを解明することで、緑地の保全やマネジメント手法に関する知見を得ることを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 鹿児島県のモイドンの研究方法： 鹿児島県錦江町と隣接する南大隅町北部を対象地とし、対象地内の17箇所のモイドンを調査対象に設定した。

モイドンの選定にあたっては、小野重朗氏が昭和30年代に当該地域を調査した記録(引用文献)を参照した。また、モイドンの立地や存続状況を調査するとともに、存続する現場の詳細を明らかにするためモイドンの空間構成要素を把握した。さらに、存続状況に影響する項目として、モイドン周辺部の昭和30年以降から現在までの空間変容、地域住民の係わり方、伝承の有無、管理体制を調査した。

(2) 奄美大島のノロ祭祀空間の研究手法： 奄美大島においてノロ祭祀が昭和期まで実施されており、かつ履歴を追うことができる奄美市名瀬大字大熊(ダイクマ以下、大熊)、奄美市名瀬大字根瀬部(ネセブ、以下根瀬部)、大和村大棚(オオダナ、以下大棚)、大和村名音(ナオン、以下名音)他計8集落を対象とし、文献調査および現地踏査、ヒアリング調査により実施した。

(3) 八重山地域のオン(御嶽)の研究手法： 既往知見(引用文献)や事前調査により、八重山において伝統的な祭祀空間が残存し、継承方法が異なると想定される石垣市の川平集落、八重山郡竹富町の祖納集落・干立集落、竹富集落の4地域を対象とした。先行研究や地元住民の案内を手掛かりに、集落のオンを踏査し、集落や地形との関係などの空間配置、およびその境内地が持つ自然生態的インフラ(防風機能、水源機能等)の現況を把握した。オンの所在する行政関係者、集落の祭祀や伝承に詳しい地元住民や祭司者に対し、オンの利用や認識状況、維持管理状況に関するインタビューを行った。オンの自然生態的インフラを総合的に考察するとともに、4地域間で祭祀空間の残存状況、認識状況、維持管理状況、継承方法等を比較し、望ましい継承システムやマネジメントの考察を行った。

#### 4. 研究成果

(1) 鹿児島島のモイドンの研究成果： [モイドンの存続状況] 調査対象とした17箇所のモイドンについて、昭和30年代と現在の存続状況を比較

すると、その場で存続するモイドンは14箇所から6箇所に減少し、移動して存続するモイドンは1箇所から2箇所に増加していた。また、モイドンとしての存続状況は不明だが、移動して形を変えて祀られている可能性のあるものが1箇所あった。現在は8箇所が消失あるいは詳細な位置が不明となっている。[立地からみたモイドンの存在意義]モイドンの立地をみると、集落の背後地の高台に位置しているモイドンが5箇所、集落の入口の比較的目標立つ場所に位置しているモイドンが5箇所、見晴らしの良い展望部に位置しているモイドンが1箇所あった。台湾や韓国、奄美大島の類似事例をふまえると、モイドンが立地する場所は集落にとって、ランドマーク機能(入口部)や防災機能(背後の山)、拠点機能(展望部)といった意味を有する空間的に重要な場所であることが示唆された。[モイドンの存続に影響する空間変容・地域住民の係わり]モイドンの空間構成要素をみると、緑と石の類を有するモイドンがそれぞれ6箇所あり、緑を基盤としながら石の類を伴うタイプがモイドンの典型であることが伺えた。一方、移動したモイドンでは石の類のみが移され、緑がなくなり、本来の空間構成から大きく変化していた。このことから、農地整備などの開発は、モイドンの敷地減少や移動、消失に加え、モイドン内の空間構成にまで変化を与えることが示唆された。一方、圃場整備や道路拡幅の影響が農業委員会・行政により避けられたケースもあり、公的機関の判断がモイドンの存続に重要であることも伺えた。次に、地域住民のモイドンへの係わりをみると、祭祀が実施されているモイドンは2箇所であり、日常的な活動が行われているモイドンは1箇所のみであった。また、モイドンの祟りによって開発が避けられてきたケースがあり、祟りや恐れといった精神的な規範が、緑地の保全行動に一定の意味を有していることが示唆された。モイドンの管理体制については、所有・管理ともに個人が担っているケースが圧倒的に多く、このことがモイドンへの係わりの希薄化

を助長していると考えられる。〔モイドンの保全・管理方策のあり方と今後の課題〕以上の結果より、モイドンが有する存在意義を地域社会で再度認識する必要があるといえる。管理体制に着目すると、自治会等の管理の中で複数の人々が情報共有を行い、集団で取り組むといったしくみづくりが必要である。集団での取り組みを活性化するしつらえとして、モイドンを構成する要素としての広場の設置や活用策を講じること、文化財指定などの公的なサポートを付加していくことが重要と考えられる。

(2) 奄美大島のノロ祭祀空間の研究成果：〔各シマにおける祭祀空間の継承状況〕大熊：昭和40年代までノロ（大ノロ）が務めていた地区である。祭祀空間の継承状況に着目すると、男性神役としてトネヤを管理しているノロの弟（70代）へのヒアリングより、カミヤマについての伝承は特にされておらず正確な場所は不明であること、カミミチに至っては聞いたこともないとの回答を得た。広場であるミャーは土俵を有す公民館の広場として継承されており、シマ一番の行事の敬老祭でもある「十五夜」という行事において相撲が奉納される。祭場のトネヤは昭和40年代に都市計画道路を通す際に場所を移動させたものの、建物は新築して継承されており、現在も十五夜やアラセチ（新節）の2行事において、地域の祭祀空間として活用されていることを捉えた。根瀬部：ノロはかなり前に不在となっており、シマの住民へのヒアリング調査より、祭祀空間の伝承については、カミヤマが奥山に相当することはわかっているが、その他の祭祀空間および装置については80歳以上の者も知らないような状況であることを捉えた。大棚：大和村最大のシマであり、現在もノロ（小ノロ）が3名現存するが、皆高齢であり、後継者は決まっていない。現在の祭祀空間の継承状況について、元ノロの身内の男性へのヒアリング調査より、カミヤマは前山という意味の「メンヤマ」が相当し、カミミチの伝承はないことが捉えられた。また、ミャーについては、シ

マの土地であり、現在は駐車場となっていた。

名音：昭和55年以降ノロが不在であり、旧暦9月9日の祭の時のみノロ一族で島を出た女性に来てもらい、拜んで貰っている。現在の祭祀空間の継承状況について、ノロの娘へのヒアリング調査より、カミヤマは水源涵養林となっており、入ってはいけない、木を切ってはいけないというシマの決まりがあることを捉えた。カミミチは屋敷や生活館の後ろなどにあり、特になにもしないがそのための空間はあけてある。また、装置であるトネヤは名音ではノロが居る家を指し、現在は建屋だけ残している。生活館の南東のスペースは、かつてシマで神を勧請し祭祀をおこなうアシャゲであった。〔祭祀空間の継承状況と都市構造との関係性〕祭祀空間の継承状況についてみると、公共性の高い広場であるミャーは比較的継承されやすく、カミヤマについては小ノロが存続する大棚や、ノロが不在であっても祭祀時に外部から女性神役の後継者を招く名音のように、女性神役の存続により物理的継承あるいは伝承されることが示された。約40年前にノロが不在となった大熊ではカミヤマの伝承が確認できないこと、ノロが不在となった時期すら確認できない根瀬部においてはカミヤマの伝承はあるものの祭祀自体が存在せず、それ以外の祭祀空間についてもほとんど継承されていないこと、などからも把握できる。カミミチについては、名音を除くすべてのシマで継承されておらず、近代以降、徐々にノロ祭祀の簡略化を進める中で、カミミチを使用することがなくなった結果、地域の記憶から消えてしまったと考えられる。以上より、基本的に祭祀空間は女性神役の存続によってほぼ完全な形で継承され、女性神役の不在年数が長いほど、ミャー以外は継承されにくいことが明らかになった。また、女性神役が継承されている場合においても、近代化に伴う住民構成および集落構造の変容に伴い祭祀を簡略化したことにより、カミミチは物理的にも伝承としても継承されていないことを捉えた。

(3) 八重山地域のオン(御嶽)の研究成果： [石垣市川平集落の事例] 祭祀空間の伝承において川平に特異な事象として、集落の各オンが管轄するとされる川平内外の小区画の土地「パカーラ」と呼ばれるオンの属地が存在することが報告されているが、その場所や生態的インフラに係る存在意味に関しては未解明な部分が多いため、パカーラに関する調査を行った。その結果、集落内の4つのオンである「赤イロ目宮鳥御嶽(アーラオン)」、「群星御嶽(ユブシオン)」、「山川御嶽(ヤマオン)」、「浜崎御嶽(キファオン)」に固有のパカーラが10~30程度存在し、ユブシオンからヤマオンの北側まではユブシオンのパカーラ、海岸部はキファオンのパカーラといった、地域的偏在性があることが明らかとなった。また、ユブシオンの31件のパカーラのうち、場所が特定できたパカーラは16件で、パカーラの面積は大小様々であるが、石や丘など地形的に高まりを有する場所や樹木に覆われた場所が多く、ランドマーク機能や防風(防潮)機能、集落の入口を守る魔除けの機能、水源涵養機能などを有していると推察された。オンやパカーラは祭司者以外の立ち入りが禁じられた現状凍結保存型の管理がなされ、パカーラについては、各オンのツカサの願いの際に唱えられるカンフツ(神言)において名称が継承されているのみであり、各パカーラの場所や存在すら集落で認識されない状況となっていることが明らかとなった。また、川平では神事に係る者は原則集落内の血統に限られ、祭祀空間の利用や維持管理、およびその認識に大きく関係すると考えられる祭祀の運営方法が、極めて閉鎖的であることが明らかとなった。[祖納・干立集落の事例] 祖納・干立は西表島内で古い伝統を残す隣接した集落であり、祖納集落では大規模なウガン(御嶽)のウブ(森)の削平がなされた場所もあり、各ウガンの自然生態的インフラについては説明が困難であった。一方、干立集落では、集落とウガンの立地関係が明快であり、集落の背山にムトゥウ

ガン(元御嶽) 集落内の井戸にククウガン(穀御嶽) 海岸部にフタデウガン(干立御嶽)といった集落内で侵してはならない防風や水源などの自然地がウガンとして担保されていることが顕著に示された。特に調査が進んだ干立集落においては、島外者が移住できる公的整備がなされ、祭祀に島外者の若年層が深くかかわっていることが明らかとなった。また、かつて海岸部にウガンのあった場所が広場として整備・活用される、ムトゥウガンの所在する高台が避難所として認識されるなど、ウガンの存在を継承しながらも空間の新たな利活用が図られていることが判明した。[竹富集落] 集落内のオンの悉皆調査により、大小多くのオンが残存し、その多くが樹林と広場や鳥居を伴い、本土の神社に近い形態を取っていることが明らかとなった。さらに、オンが祀る対象も様々であり、アガリパイザーシのような島の起源を示す自然石もあれば、ムーヤマ(六嶽)と呼ばれる祖先の居住跡やニシトウオンに代表される島の功績者である場合などがあり、生態的インフラの解明には至らない御嶽も多く存在した。また、オンの境内地や属地とは別に、島の資源や防風・防潮として重要な海岸林の大部分が共有地として守られてきた経緯があり、オン以外の緑地の生態的インフラも確認された。祭祀や集落の運営においては、公民館組織が意思決定の最高機関であり、島外者は公民館組織で伝統を学習する仕組みを取っている。そのため、居住者はオンに関する認識が高く、オンの維持管理も公民館管理、氏子管理、個人管理と明確な規範が存在することが特徴であった。また、公民館組織の議会制により、開発行為の抑制等、オンと観光との共存も図られていることがわかった。[総合考察] 以上のように、アニミズム思想を背景とした祀られる対象が自然物であるオンや属地の場合、その場所と神を切り離すことのできないランドマーク機能や、防風機能、水源涵養機能といった集落における自然生態的インフラとして機能していたが、集落形成後に祀られたと考えられる功績者

や火の神など多くのオンにおいては、場所に必ずしも明確な意味を有しないことが考察された。また、オンの継承には集落行事や祭祀の運営方法が大きく関わっており、閉鎖的な川平では認識が薄れ、島外者が運営の中心となる干立ではウガンに新たな利活用が図られる事例があり、島外者に伝統を継承する仕組みを持つ竹富ではオンが健全に維持されていることが明らかとなった。祭祀運営に島外者や新規居住者をいかに参入するかがオンの継承に肝要であることが考察された。

#### <引用文献>

- 谷川健一編(1995):日本民俗文化資料集成 第21巻 森の神の民俗誌:株式会社三一書房  
湧上元雄(2000):沖縄民俗文化論—祭祀・信仰・御岳:(有)榕樹書林  
牧野清(1990):八重山のお嶽:あ~まん企画

#### 5. 主な発表論文

##### 【雑誌論文】計1件

上田萌子・大平和弘・押田佳子・上甫木昭春 (2016) 鹿児島県錦江町周辺における「モイドン」の立地と存続状況に関する研究. ランドスケープ研究, 79(5), 659-664.

##### 【学会発表】計2件

上田萌子・大平和弘・上甫木昭春 (2015) モイドン(森殿)の緑地計画の意味に関する一考察 鹿児島県錦江町周辺を対象として. 社叢学会, 海の道むなかた館, 宗像市.

上田萌子・大平和弘・押田佳子・上甫木昭春 (2016) 鹿児島県錦江町周辺における「モイドン」の立地と存続状況に関する研究. 日本造園学会全国大会, 信州大学, 松本市.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

上甫木 昭春 (KAMIHOGI Akiharu)  
大阪府立大学・生命環境科学研究科・教授

研究者番号 70152858

##### (2) 研究分担者

浦出 俊和 (URADE Toshikazu)  
大阪府立大学・生命環境科学研究科・助教  
研究者番号 80244664

押田 佳子 (OSHIDA Keiko)  
日本大学・理工学部・准教授  
研究者番号 10465271

上田 萌子 (UEDA Moeko)  
兵庫県立人と自然の博物館・自然環境マネジメント研究部・研究員  
研究者番号 10549736

大平 和弘 (OHIRA Kazuhiro)  
兵庫県立人と自然の博物館・自然環境マネジメント研究部・研究員  
研究者番号 90711169

##### (3) 研究協力者

松尾 あずさ (MATUO Azusa)